

リトミック雑考(その2)

野上俊之

リズムへのアプローチ

音楽リズムの定義づけは、現在においても非常に困難な問題とされている。我々が、リズム・タクト(拍子)・テンポという語彙を混同して用いることがしばしばあることから明らかであろう。リズムとは何かを考えると、音楽学的アスペクトから、音楽教育の観点から、また、身体の動きを通して生理学的に、そして、思考段階を心理学の観点から論ずることが可能である。

ダルクローズ以前は、リズムを時間的概念からのみ説明していたのであるが、リトミックでは、リズムの定義を動きの中に見出そうとしている点において画期的であったといえよう。このことは、音楽が人間の感情から生ずるものであり、感情は全身の動きから学ばねばならないという、ダルクローズの考察によっている。動作を思考発達の第一義とし、音楽反応を通じて「大脳と運動中枢の調和と神経組織の道程確立による創造的で芸術的な活力の意識」⁽⁴⁾化、プロセスで得られる諸能力⁽⁵⁾は、リトミックの今日的意義でもある。

Im Anfang war der Rhythmus. (はじめにリズムありき) という、ハンス・フォン・ビューローの言葉がある。これは、メロディーやハーモニーとリズムとの比較ではなく、タクトと比べたとき、リズムが先にあるという意味である。すなわち、タクト通り演奏してもリズムを成さな

い場合があるが、リズムを守った演奏は、タクトも正確であるといえる。

メトロノームや時計の振子の機械的な反復運動は、客観的には同じ音量、音質で等間隔に聞こえてくるはずである。心臓の鼓動も、平静状態では規則正しい反復運動を行なっている。しかし、これらは、およそ意志とは無関係である。これに反し、呼吸は意志の力に属し、主観的な生命を与えることができる。このことが、タクトとリズムの原理に結びつくといえる。マティス・リュシィは、タクト・リズムとも時間の永遠性とアクセントによる時間分割の必要性という同じ原理から発生しているが、タクトは本能の領域にとどまり、規則的で機械的な時間の分割、断片の観念しか与えない。一方、リズムは知性の領域に届いており、理解しうる知性的な本質の形のもとに現われるという。⁽⁶⁾

呼吸のリズム

人間が行為、行動を起こすとき、脳、心臓をはじめ身体のあらゆる部分で収縮運動がリズムカルに繰り返されている。このことは、生命現象がリズムに支配されているともいえよう。呼吸のリズムはその基本になる。

ところで、リズム感の発達には、運動能力を構成する諸因子のうち、敏捷性、協応性、巧緻性の発達と密接な関連があるという。⁽⁴⁾しかし、そこに呼吸のリズムがなけ

れば、単なるタイミングがよいというだけであろう。呼吸のリズムが如何に重要で、不思議な力をもつかは、ピッチャーのコントロールやバッティングのタイミング、相撲の立ちあいなどスポーツの例では事欠かない。そこでは、身体の動きと呼吸が一体となり、精神状態と関連してはじめて力が発揮されるのである。これは音楽の基礎にも通じる。

呼吸には呼気と吸気がある。吸気は生命がこの世で初めて行なう行為であり、動作を具現し、拍子の弱拍、飛躍、緊張、上拍に当たる。呼吸は最期の行為、停止であり、拍子の強拍、休息、弛緩、下拍に対応する。また、呼吸は時間の均等分割の感覚を与え、小節感、フレーズ感を与える。さらに、本能的に2拍子をつくり、熟睡したときには3拍子を構成する。



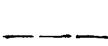
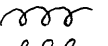


ある動作を考える時、呼吸は一サイクルごとにさまざまな山の形を生ずる。リズムは一つ一つ緊張と弛緩を伴ない微妙な変化をしているのであるが、全体の流れとしては、山という共通の形をつくっていく。一連の音や小節を秩序づけ、その全体に本質的な性格や個性的な性格を与え、知的な要素を刻みつける能力をリズムはもっている。⁽⁵⁾

さて、リトミックが我が国に紹介されて60余年。その間、はたして正しく理解され、実践されているといえようか。このたび、世界的にリトミック教育の第一人者であるR. M. エイブラムソン氏の講習を受講する機会を得た。氏は非常に高い音楽性と広い様式感を見え、ポスト・ダルクローズとして、最も忠実にその理念を実践しているといわれている。以下、その講習内容を踏まえながら記してみる。

アナクルーズ

今回のテーマを一言でいえば「アナクルーズ」につきる。アナクルーズとは、リズムの第1拍、強拍に属し、それに先行する音符または音符群のことをいう。アナクルーズは音楽において非常に重要な役割りを担っている。それは吸気に一致し、重力からの解放である。また、いろいろな拍にアクセントを生み、強さやニュアンスに変化を生じさせ、躍動感にあふれ、エネルギーにする。リズムの魂であり、究極的には演奏の魂である。⁽⁶⁾

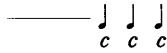
クルーズ（下拍）、メタクルーズ（中拍）、アナクルーズ（上拍）を図解すれば次のようになるうか。

C (クルーズ)	↓			チン チン チン
M (メタクルーズ)	—			ターターター
A (アナクルーズ)	↑			ターターター → → →

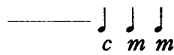
- (1) 3 の時、普通は $\downarrow \downarrow \downarrow$ となるので
 \uparrow $c \ m \ a$
 あるが、舞曲によってさまざまに変化して行く。

ex.

初期ドイツの農民の踊りであるレントラー



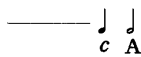
17~18世紀のダンスであるメヌエット



19世紀のドイツのダンス



フランスのワルツ



(Aはよりエネルギー
なアナクルーズ)

- (2)リズムの分割によって、いろいろなアナクルーズをかもし出す。

ex.



分割によってc、m、a、の変化が生じる。



細分化されたリズムはエネルギーをはらんでくる。

- (3)休符は一般に、単なる休みと考えやす

いのであるが、ダルクローズがそれを活かしたものと捉えたことは注目すべきである。ある時はおかしさを、またある時は悲しさ、驚き、恐れ、興奮など、沈黙の中に生命を感じる。すなわち、休符はアナクルーズをはらんでいる。

ex.



(Cは力強いクルーズ)

以上のことは、実際に音楽と動きを伴うことによってはじめて実感できるであろう。

ダルクローズは、リュシィが確立したアナクルーズを身体的概念にまで発展させ、実践に移した。そして、ソルフェージュとの関わりの中で、ニュアンス・フレーズ・アクセントの各法則を導き出している。

次の表は、動きの中における自然なリズムの関係を表わしたものである。

時間 (速度)	遅	速
空間	広	狭
エネルギー (ダイナミックス)	大(強)	小(弱)
音高	低	高
表情	緊張 高重 激	弛沈 静快 静寂

実際の音楽や動きでは、これらの関係を意図的に変化させ、独特のニュアンスを表現する場合も多い。⁽⁴⁾

我々が音楽を演奏する時、手は正確によく動く。しかし、単なるタイミングとして楽譜をなぞっても、生きて流れる音楽は創造できない。音楽リズムの内容の理解が何よりも先決である。

(2)神原雅之・野上俊之、リトミック・アプローチ、1982、pp.11～13

(3)マティス・リュシィ、板野平訳、アナクルーズ、全音楽譜出版社、1979、p.76

(4)布谷光俊、幼児のリズム感発達についての研究—リズム感と運動能力の関連について—、1981年、全日音研における発表から

(5)リュシィ、前掲書、p.75

(6)同上書、p.13

(7)神原・野上、前掲書、p.14

註

(1)E.J.ダルクローズ、板野平訳、リズムと音楽と教育、全音楽譜出版社、1975、p.86

(講師)

〔名言〕

リトミック（リズム運動）は、音楽的形式の細部を肉体の動きによって忠実に翻訳することではなく、人間の基本的な衝動や直観的な情熱によって生まれた心の振動を肉体の領域に移し変えることである。

—E. J.ダルクローズ—